



インガラバー

こんにちは

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0023
岡山県岡山市北区駅前2丁目4番23号
TEL: 086-224-0102
FAX: 086-221-2554
URL: http://www.mjcp.or.jp

寄贈の診療所 3つ増え11か所に

亡兄の感謝の思い託して



贈呈式では看護師・助産師協会のナントーンラ会長から武本さん(左)にペナントが贈られた

協会の呼びかけでミャンマーに寄贈の診療所が3つ、相次いで開設された。これまでの8カ所と合わせて、2ケタの11カ所に増えた。いずれも最大都市ヤンゴン近郊などの医療過疎地にあり、地域診療の中心になっている。

第1号は協会発足から2年後の2008年。順次、古い診療所が壊れかかっているような所や周辺の人口が急増して機能が果たせなくなった場所に開設された。ミャンマー保健官などによって運営されている。開設順に診療所名と寄付者は次の通り。

これまでの8カ所

- ① 下野クリニック(08年、11年産院併設) 理事下野國夫さん
- ② NPOクリニック(09年) サイクロン被害で募った募金
- ③ あかねクリニック(09年) 理事西山央子さん
- ④ アーリンヤン 希望クリニック(10年) 会員南川志津子さん
- ⑤ とぎわ・オカコンクリニック(11年) 賛助会員の岡山コンクリート工業設立50周年事業
- ⑥ 井上クリニック(12年) 会員井上浩さん
- ⑦ 白ゆりクリニック(12年) 会員品川美和子さん
- ⑧ 中国建設クリニック(13年) 賛助会員の中国建設工業

⑨ 西山堅クリニック

岡山県赤磐市黒本の会社役員西山堅さんにとって、ミャンマーは亡き兄勝敏さんの思い出につながる国だ。旧吉井町(現在の赤磐市)の町長を務めた勝敏さんは青年のころ、太平洋戦争直前のビルマで農業指導にあたったことがある。異国での体験はいつまでも忘れ難かったらしく、生前によく「あの時、ビルマの人は大変、日本に好意的だった」と話していたという。堅さんは兄のそんな感謝の思いを込めて寄付した。開設場所はヤンゴン郊外の町工場が混在する農村地帯。老朽化した産院をそっくり建て替えた。ミャンマー

看護師・助産師協会が運営する「母子センター」で、助産師をめざす学生の実習場所にもなっている。昨年末の12月30日の贈呈式には、西山さんの親族代表として赤磐市社会福祉協議会副会長の武本一郎さんが出席。協会からもお祝いに「武者人形」などを贈った。

岡田茂理事長は贈呈式に続いて3月上旬にもクリニックを再訪。助産師になるために5人が実習しており、それも4人はバンガラデシュやタイ国境の遠い所から来ていた。出産数も旧施設では月10〜20人だったのが、1ヶ月余りに50人と大幅に増えていた。また、西山さんはこれまでに、血圧計3つと体温計130本を贈っている。

創立50年を記念して



村人は踊りと拍手で診療所のオープンを祝った

⑪ 岡山プラザホテルクリニック

ヤンゴン中心部から車で約1時間半、近くには新しい工業団地もある人口約4千人のシンフォン村。3月10日ここで「岡山プラザホテルクリニック」の贈呈式があった。同ホテル(岡山市中区浜)が会社設立50年の記念事業として寄付。協会理事の永山久夫社長をはじめホテル関係者5人、協会員ら8人が出席した。ここも既存の診療所の老朽化がひどく、村民は病気になることも衛生的な環境で治療を受けるのが難しかった。

同期の医師仲間5人で

⑩ Mie61クリニック

昭和61年(1986年)に三重大学医学部を卒業した整形外科医の仲間5人が



⑩ ティーフットで、開所を祝った。元の診療所は高床式の竹で編んだ壁とトタン屋根だった。

寄付した。協会理事でもある筈井裕一・同大学教授の呼びかけに、北村哲也さん、佐々木浩樹さん、堀川一浩さん、村田昌浩さんの4

師が賛同した。ヤンゴン市街地から北へ車で約1時間半。ここには以前から診療所があり、急性の呼吸器疾患や下痢、発熱などの患者が多かったが、今にも崩れ落ちそうな建物だった。

助産師宿舎も併設した新しい診療所の贈呈式は1月15日であった。筈井教授はこのころミャンマーを訪れていたが、当日はワンダレー総合病院での手術指導と重なり、他の医師も勤務上の都合がつかず、代わりに岡田理事長ら協会員が出席した。診療地域は7つの村の約6千人だが、近くに工場団地ができて人口は増えているという。その「地域診療所」となるだけに、式には多くの村民が集まり、期待の大きさがうかがえた。

全面建て替えの新しい診療所には産室も設けられ、助産師が常駐する。村ではこれまで年間約70人が出産していたが、すべて自宅だった。これからは整備が整った産室で安心して出産できるようにになった。式は、大勢の村民が集まってお祭り騒ぎのような音楽と踊りで盛り上がり、村長がお礼を述べた。同ホテルと同じグループの岡山コンクリート工業も2011年にクリニックを寄付している。

援助はフォローが大切です

岡山大学病院の手術室新設に伴って、これまで使っていた大型麻酔器3台がミャンマーへ贈られたことは前号で紹介。ところが、うまく動かない。去年11月末、急にタイ国境に近い病院へかけた医師の報告です。

麻酔器点検に 州へ

岡山大学病院
麻酔科 小林 求



点検後、病院のスタッフと記念撮影。後の右が小林医師＝カレン州パアン

それは岡田茂先生からのメールがきっかけでした。「贈った麻酔器のうちパアン総合病院のがうまく動いていないので見に行ってください」。去年1月に岡山大学の医療支援チームに参加して、この国が大好きになっていたこともあり快活しました。直前に宿泊予定のヤ

ンゴンのホテルで爆弾テロがあったというニュースが流れ、少しドキドキしながら人生2度目のミャンマーへ向かったのです。治安は問題なく、ホテルも快適でした。翌朝、ヤンゴンから車で約6時間かけてカレン州パアンへ。総合病院は約200床あり、麻酔科医は2人いて、年間2000症例の手術を管理しているとのことでした。特に多いのは交通外傷らしく、道中の交通事情を考えるとこれは納得でした。道は車だけでなく、バイク、自転車、歩行者、犬、牛、豚、馬などが入り乱れ、それどこから出てくるかわからない。まるでスターウォーズの空中戦のようでした。肝心の麻酔器は、何とか

動かようになりました。翌日には州知事まで招いた贈呈式があり、僕まで記念品をいただきました。僕が麻酔器を贈ったわけでもないのでも心苦しかったですが、岡山大学を代表してありがたいにしたいとおきました。さらに南に下ってモンゴルのタンビユザヤという町の診療所などを見学。ミャンマーの地方医療事情を目の当たりにし、驚くともにもつとこの国を支援していかなければならないという思いを強くしました。

帰国前にはもう一台の麻酔器を見にヤンゴンの中央女性病院へ。いろんな事情でまだ稼働していませんでしたが、問題は解決して使えるようになりました。今回強く感じたのは、こういう援助はフォローが大切だということ。実際に来ると、日本では考えてい

なかった様々な問題がありました。現地でも何とか解決しようとしているが、難しい場合もあります。もう一つ感じたのは、日本から物を贈るときに、相手のことを考えないと、実際には使われず埃をかぶってしまうこともありうるのです。使う側の立場を考えれば、日本で準備できることもあったように思います。約1年ぶりのミャンマーでしたが、この間にも凄まじい発展を遂げました。茶髪やデニム、ミニスカートなど若者のファッションも大きく変化してきています。でもそれに社会情勢がついて行っていないように感じました。もちろん医療もその一つです。いろいろな反省点の多い旅でしたが、この経験を生かして今後もこの国の医療の発展に協力していきたいと思えます。

支援の重要性 痛感しました

のての
初め
ミヤ
杉村留実子

鳥取大学医学部
医学科 4年

実のところ、発展途上の医療についてとても関心があった訳ではありません。ミャンマーってどんなところだろう？ そのくらいの気持ちで、3月2日から11日までの医療施設見学の旅に参加しました。刺激を受けること、考えさせられる

ことが多い旅でした。2日間滞在したナパリという村ではベンガル湾の美しさに圧倒されるとともに、岡田茂先生からビルマ戦線の話や、ミャンマーと日本の歴史的な背景を知りました。医療について学ぶことが多いだろうと思っただけですが、歴史についても自分自身の不勉強を痛感し、関心の方向を医療に限定しては人間性

が広がっていかないといいました。ヤンゴンでは、改築予定の診療所を訪問。日本で当たり前のように受けられている医療がまったく整っていない現状はとても衝撃的でした。ミャンマーで一番大

きな病院であるヤンゴン総合病院の外では、診察を待つ患者さんや家族がいて、日本にはない光景でもと驚きました。口唇裂の子供が多いのに十分な手術を受けられていないことを知り、日本なら口唇裂を治療せずに成長することはほばないが、ここではまだ十分な施設と人材がないため治療を受けることができない子供が多いと思うと胸が痛みました。

新しい診療所の贈呈式にも参加し、村の人たちの歓迎ぶりや圧倒されました。一緒にダンスをして楽しい思い出ができました。大歓迎の中でも村の貧富の差や医療の不十分さを目の当たりにすると、これからの皆さんの問題に直面するのだからと感じざるを得ませんでした。

DMRという研究所で見た学した子宮がん検診センターでは、このような検診を行っている施設は国内に少なく、とても遠い地方から検診を受けに来ていました。日本の支援によって国の死亡率

協会だより

3都市で指導

岡山大学病院の形成外科グループ(木股敬裕教授ら13人)と口腔外科グループ(飯田征二教授ら2人)、三重大病院の整形外科グループ(笠井裕一教授ら6人)、それに脳外科グループ(鈴木倫保・山口大学教授、小野成紀・川崎医科大学)が1月中旬にミャンマーを訪問。ヤンゴン、ネピドー、マンダレーの総合病院で、手術の実地指導をした。

特別講演や発表

ミャンマー医学研究総会が1月6日・11日ヤンゴンであり、尾崎敏文(岡山大学)が骨盤腫瘍の再建術について特別講演した。またシンポジウムでは、土井原博義(同教授)が乳癌・内分泌外科)らのチームが医療コンサルタンツ会社メディアバ(本社東京)とともにミャンマーで進めている乳がん検診の指導とその成果について発表した。

車いす30台贈る

京都東ロータリークラブ(田中誠二会長)が協会を通じて、車いす30台をミャンマーに贈った。3月6日にヤンゴンで贈呈式があり、モン州26台、ヤンゴン2台、マンダレー2台になった。同クラブの車いす寄贈は、これが4回目。

モウツザイ教授 歓迎会を開く

ヤンゴン医科大学(Ⅰ)の教授で、ヤンゴン総合病院形成外科主任のモウツザイ教授が長崎大学で開かれた学会に招待されて来日。4月12日夕、岡山市内のホテルで歓迎会があり、協会関係者ら約30名が出席した。手術指導などで何度もミヤ

研修医師に 特別賞

協会の招きで2006年と08年の2回、岡山大学で研修したムムシエ医師が、1月のミャンマー医学研究総会で特別賞を受けた。パピローマウイルスの感染症と発がんについての研究が高く評価された。同医師は現在、ヤンゴンにある子宮がん検診センターで中心となって診療や研究をしている。



編集後記

かつて「草の根」という言葉をよく見たり聞いたりしました。いわく「草の根民主主義」「草の根交流」…。民衆の草の根に根をおろす、といった意味です。寄贈の診療所が2ヶ台に乗った記事に、この言葉が重なり合いました。今、ミャンマーは国際社会の熱い視線を浴びており、経済や開発の話はつきません。そんな中、

医療過疎や貧困の地域に1つ1つ、皆さんの寄付で診療所をつくってきた活動は「草の根支援」と呼ぶのがふさわしいでしょう。西山堅クリニックで生まれた最初の赤ちゃんの名前は「ユキ」。ミャンマー看護師・助産師協会の会長が日本語の「幸」から取って名づけたそうです。赤ちゃんの健やかな成長と日本への深い感謝がこもった、嬉しい話です。(西崎)